

今日の子どもの地域における遊びの真態 (その1)

—鹿児島県K市での実証調査から—

〇黒川 久美(第一幼児教育短期大学)。山下 雅彦(第一工業大学)

II. 実証調査の結果と考察

1. 調査の概要

<調査目的>

地域における子どもの遊びの実態をとらえる、同時に地域の子ども遊び地図を作成する。

<調査期間>

- ①第1次調査: 1985年5月中旬~6月上旬。
- ②第2次調査: 1985年11月下旬~12月上旬。

<調査内容・方法>

①第1次調査: 鹿児島県K市の3地区6コースを平日の午後、休日の午前、それぞれ2時間ずつ、道路にそって歩いて回り、視界にはいる子どもの遊びすべてを採集し、記録した。同時に可能な限り遊んでいる子ども及び地域の大人に対しインタビューを行った。

遊びの主な記録項目は次のとおりである。①遊びが行われている場所、②遊び集団(人数、性別、年齢)、③大人の同伴の有無、④遊び内容(種類、対象、内容)。

②第2次調査: 第1次調査と同一の地区を歩いて回り、出会った子どもの遊びを観察、記録した。同時に可能な限り遊んでいる子どもへのインタビューも行った。遊びの主な観察・記録項目は第1次調査とほぼ同様であるが、遊びの内容(遊び方)をより詳しく観察し、記録するようにした。

では以下、調査結果を遊び場、遊び集団、遊びの内容の順に述べていこう。

2. 遊び場について

調査したK市は近年、田畑を造成して工場や団地の建設が進んできているとはいえ、まだ周囲には田畑や川など自然が残っており、交通量も大都市ほど少なく、子どもたちが遊び場を比較的に出しやすい環境にある。ところが図1に示すように遊び場は児童公園、

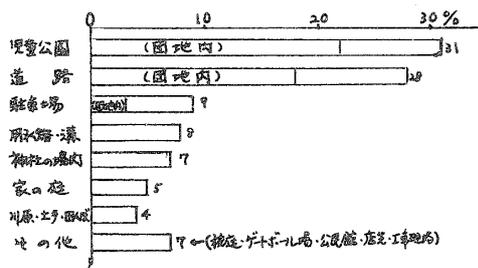


図1. 遊び場

道路に集中しており、両者あわせると6割近くを占める。子どもたちの

遊び場がいくつかのところに限定されてきていることがうかがえる。

3. 遊び集団について

表1. 遊び集団の大きさ・年齢構成 (N=74)

人数 年齢構成	1人	2人	3人	4人	5人	6人以上	計
幼児のみ	13 ⁽¹⁾	12	3	0	4	1	33(45%)
小学生のみ	9	5	6	2	0	0	22(30%)
幼小混合	—	4	7	1	2	3	17(23%)
不明	—	2	—	—	—	—	2(3%)
計	22 (30%)	23 (31)	16 (22)	3 (4)	6 (8)	4 (5)	74

遊び集団の大きさは表1に示すように、1人及び2~3人が大半を占めており、5~6人以上は1割を占

上回る程度である。

2人以上の遊び集団の年齢構成をみると、図2に示すように幼児だけの集団が40%と最も多い。幼児と小学生の混合集団は17件(24%)であるが、このうち小学校中・高学年児を含む集団は6件にすぎない。

地域における子どもの遊び集団は幼児・小学校低学年児という幼い子どもたちからなる、せいぜい2~3人の小規模な集団が大勢を占めている。前述した遊び場が限定されてきていることも、このことと関係が深いと思われる。

幼児のみ 40% (29件)	小学生のみ 26% (13) 小学校中・高学年児を含む 14 (17)	幼小混合 34% (17)
-------------------	--	------------------

図2. 2人以上の遊び集団の年齢構成 (N=50)

4. 遊びの内容について

私たちが採集した地域における子どもの遊びはそのほとんどが、定まった形態も、ルールや約束もない「不定形」(かみさとし『子どもと遊び』)の、プリミティブな遊びであった。従って、一定の形の整った遊びを対象とした従来の遊びの分類法によつたのでは遊びの実態を十分把握することができない。こうした「不定形」の、プリミティブな遊びを含めて、実態を分析する枠組をいし視点が新たに設定される必要があると思われる。

ところで私たちは未だ明確な分析の枠組をもっていないわけではないが、ここで述べたように、遊びにおける交わりに着目することが今日の子どもの遊びの問題

に迫る際、有効ではないかと考えている。

そこで、今日の子どもの地域における遊びの実態に即した分析枠の設定を今後の課題の一つとして念頭におきつつ、そのための基礎作業として、ここではとりあえず、個々の遊びにみられる特徴的な対象や行為をもとに遊びをグループングし、それを遊び集団と関連させながら、言い換えれば遊び内容を遊ぶ主体の行為活動とのかかわりで検討していくことにしたい。表又はそのようにしてとらえた遊びの内容である。

先ず第一に遊びの内容について全体的にみると、すでに述べたように大部分が「不定形の遊び」であり、この遊びやルールのある遊び、伝承遊びは極めて少ない。最も多かったのが自転車、続いて固定遊具での遊びで、両者をあわせると40%近くに達する。また、おしゃべりやブラブラしているという、た遊びにならない「遊び」が固定遊具での遊びについて多い。更に件数は少ないとはいえ、プラモデルや玩具自動車機など商品玩具での遊びもみられ、子どもたちの遊びにおける受動的、消極的な傾向がみいだされる。

第二に遊び方についてみると、土いじりをする、泥を川になげこむ、プラモデルをいじる、ブランコはただこぐだけという、たように、対象が何であれ、機能的

表2. 遊びの内容

遊びの内容	件数 (%)	遊び集団												具体例		
		幼児のみ				小学生のみ				幼児含む						
		1人	2人	3人	4人以上	1人	2人	3人	4人以上	1人	2人	3人	4人以上			
自転車のり	15 (20%)	5	6	1	3											自転車、三輪車、脚踏車、のりえわすをこ
固定遊具での遊び	13 (18)	1	3			1	2	1	4	1						ブランコ、のりこ、自動車、のりえわすをこ、うんこを落とす
砂、土、水の遊び	8 (11)	2	1	1		2		1	1							土、砂、水、穴ほり、泥の投げつけ、川に泥をながす、水たまりあつ
動物との遊び	7 (9)	1		1	1	2		1	1							虫、魚、カエルをかまふ、虫や魚をみるをこ
植物での遊び	5 (7)					3					2					葉をみる、葉を流し、葉をほのなげつけあつ
ボールでの遊び	5 (7)					1	1	1	1	1						ボールをなげる、けりあつ、野球のノック練習をこ
ごっこ遊び	3 (4)	1	1						1							まごご、チャコラごこ
おもちゃでの遊び	3 (4)	1									2					おまけにニカを遊ぶ、玩具自動車機からおもちゃのりえわすをこ
木のぼり	2 (3)					1	1									園地内の木に登り、ぶら下がりを、をこ
おいかけご	1 (1)														1	ブランコ、金棒のせりあつ、おいかけあつ
ツボン玉とぼし	1 (1)	1														園地内の道踏を
庭まじり	1 (1)		1													母親の手で庭をほりまじり
おしゃべり	6 (8)	3	1						1	1						土いじりしながらおしゃべり、アイスクレームのなごりおしゃべり
ブラブラしている	4 (5)	2			2											葉、おもちゃをこ、土をこ、水たまりをこ

なレベルの遊び方が主となり、しかもこれが幼児にも小学生にも共通した傾向となっている。

第三に、第二の点を交わりという視点からとらえてみると、遊び集団の規模や年齢構成にかかわらず、遊びが物と子どもとの関係だけに閉ざされているということが出来る。何人かで遊んでいても、ここでは子どもと子どもとの関係、子ども相互の交わりが希薄であり、物-子どもとの単純な連続的加算にすぎないといえる状況である。

以上、第1次調査結果をもとに、「不定形の遊び」を中心にして検討してきたが、次に第2次調査において観察された遊びの中から、「定形の遊び」の事例を一つとりあげ、検討しておく。

5. 事例の検討

<事例>

園地内公園における、小学校低学年の女児3名(A, B, Cとする)の遊びである。3名でボールのけりあいをしばらくした後、AがB, Cを呼び、何か話をする。その後3人は地面に野球のダイヤモンドの線をひき、「サッカー野球」(子どもたちがそう呼んだ)を始める。AとB, Cに分かれ、先ずAのころがしたボールをBがけり、Bは1塁にすすむ。次にCがけり、たボールが「ファウル」になった後、再度AがCに対してボールをころがそうとした時、別の女児Dが公園にあらわれる。AはDのところへかけ寄り、続いてB, CもAの後を追って行く。その後は4人でおしゃべりをする。

野球を模したスポーツ的遊びである「サッカー野球」はこの子どもたちにとっては手に余る遊びといえる。スポーツ的遊びは大鑑ら(『あそび百科』)の言うように、この遊びをしたために必要な仲間や場所を求め、あそびはつくることで面白く遊ぶ。事例の遊びの経過をみると、子どもたちは「サッカー野球」をするために集まり、たのではなく、3人で何をしようかというところから出発している。ところが子どもたちは条件に応じて遊びを選んだり、遊び方を工夫するのではなく、おしゃべりの子もたつには手に余る遊びを無条件にせりはじめている。従って遊びは他児の出現によって簡単に消滅している。

6. まとめ

一方で物との関係だけに閉ざされ、他方で「規格式」の遊びの無条件的受容という子どもの姿は、交わり能力の獲得の不十分性からきているといえないだろうか。